

フリーベル幼稚園における子どもたちのための園庭
—フリーベルの菜園計画の発掘とその検討—

A study on the garden for children at Froebel's Kindergarten
—Based on digging out the gardening plan by Froebel and its study—

藤井 恵美子*・石川 道夫**
(平成25年2月6日受理)

要約

現在、日本において幼保一体化の方向に向けて、様々な形態の保育、幼児教育施設が混在している。そのような中で、子育て支援の一環として建てられている幼稚園・保育所には、園庭のない施設が少なからず存在している。子どもが屋外で自由に遊び、自然と触れ合う空間のない幼児教育施設は、幼稚園の祖フリーベルが理想としたものとは、かけ離れたものである。幼児の発達にとって園庭の意義を再発見するべく、フリーベル幼稚園の誕生の地を訪ね、子どもたちの園庭について調査、資料収集を行った。従来、未報告の資料の発掘もあり、新資料を加えて、子どもたちの健やかな発達のためにフリーベル幼稚園の生活の中で子どもたちにとっての園庭の意義と中でも特に菜園の計画について検討と考察を試みた。

キーワード：フリーベル、幼稚園、子どもたちの庭

keywords : Froebel, kindergarten, a garden for children

1. はじめに

フリードリッヒ・フリーベル (Friedrich Fröbel, 1782年-1852年) は、1840年、バート・ブランケンブルクの地に、同じチューリングゲンの同郷人のランゲンタールとそのベルリン大学時代の知人でマルク伯爵領出身の神学徒ミッデンドルフと共に世界で最初の幼稚園 (Kindergarten) を開設した。その際、その幼児教育施設に「子どもたちの庭」という意味の「幼稚園」(キンダーガルテン) という呼称が発案されたことは非常に意味深いことである。

フリーベルは、元来幼児教育に携わるべく教員養成の課程を修めた人ではなく、23歳で小学校の教師になり、ペスタロッチーのもとで学び、兄嫁から兄の遺児3人の教育を託されることで、初めて1816年、34歳でカイルハウ学園を開いたのが最初の学校創立になる。その後、ブルクドルフの孤児院院長を経て、新しい時代の教育は家庭教育と幼児教育を中心としなければならぬと痛切に感

じ、「1836年は生命の革新を要求する」(Erneuerung des Lebens erfordert das neue Jahr 1836.) という著名な論文を発表して、1837年、ウィルヘルミネ夫人の提案で、カイルハウ近くの水車小屋を借りて、「自己教授と自己教育とに導く直観教授のための教育所」を56歳で創設する。

その後、フリーベルは教育遊具、後に「恩物」(Spielgaben) と呼ばれるようになるものの開発に没頭し、その発売に合わせて教育所の名称を、「幼少年の作業衝動を育むための教育所」と改称した。ここまで、「教育所」は、名前こそ教育施設のようなものであるものの、実態は遊具の製作と販売のための工房のようなもので、それが1839年にバート・ブランケンブルクに「幼児教育指導者講習科」という名称のもとに、世界初の保育者養成機関を開設する。この機関の講習生に保育の実習をさせるために、近在の6歳以下の幼児たちを集めて保育体験をさせることになった。これが、「世話、

(*ふじいえみこ 保育科准教授 教育学)

(*いしかわみちお 藤田保健衛生大学教授 教育学)

遊び、および作業の教育所」(Pflege-, Spiel- und Beschäftigungsanstalt)と名付けられ、これが1840年に改名されて、かのキンダーガルテンとなるのである。

この幼児のための教育施設にふさわしい名前をというのが、その後フレーベルの懸案となり、1840年の春の日、フレーベルがミッデンドルフらとチューリングゲンの森をカイルハウからブランケンブルクに向かって帰路の途中、スタイゲル山の山道から眼下に広がるブランケンブルクの美しい風景が、大きな花園のように見えて¹、その美しさにフレーベルが思わず、

「見つかった!見つかった!その名はキンダーガルテンでなくてはならない」と叫んだことは、よく知られている²。

荘司泰弘は、フレーベルがそのキンダーガルテンを、「天国の園、もちろん、子どもの園、子どもたちに再びお授けになり、与えたもうた天国」とも呼んでいることを指摘しながら、「キンダーガルテン(子どもの園)は、名称の示す通り、園や庭という豊かな自然環境による人間教育を意図している。自然環境に内在する神の摂理によって、環境に関わる力(自己教育力)が建設的な方向(生命合一)に調整されることになる³」という。

合わせて、荘司は、フレーベルのキンダーガルテンが日本に紹介された時に、三つの大きな勘違いが生じ、それによって、フレーベルの幼児教育の思想と実践は間違った仕方、日本に導入されてしまったという。

それは、第一に、教師が、大人としての権威で持って幼児を指導する場にしてしまったこと、第二に、保育が「授業」の一環として教室という室内で行われたこと、第三に、園庭ではなく運動場が作られたこと。

これらによって、荘司は、本来幼児の創造的な活動を元として、子ども同士が互に関わりあう事によって自ら成長していくのを援助するための施設として意図されたものが、小さな子どもたちに権威ある大人が授業を与えるものに変質してしまったのではないかというのである。子どもたちは、教室という室内に押し込められるべきでもな

いし、授業されるべきでもない。生活の中での遊びや、教育玩具としての恩物、そして、「園庭」が「子どもの園」の中で与えられていたはずの意味を再発見するべきというのである⁴。

ところで、生活の中の模倣遊びを導入する「母の歌と愛撫の歌」、また恩物については、既に数多くの論文や研究が発表、刊行されているが、フレーベル幼稚園の園庭については、あまり研究が発表されていない。フレーベル自身のものでは、邦訳の全集第4巻に収録されている『幼稚園教育学』の中の第17章「幼稚園における子どもたちの庭」とそれに添付された菜園の造園計画のスケッチが、ほとんどすべてといってもいい。

ところが、ハンス＝ヨアヒム・シュムツラーの“Fröbel und Montessori Zwei genial Erzieher — Was sie unterscheidet, was sie verbindet” 2Afl. 1991の中でのフレーベルについての章の最後の部分が、母の歌と愛撫の歌、恩物、運動あそびと続いて、最後が「庭仕事と動物の世話」で結びとなっており、その庭仕事についての叙述が、フレーベルの「幼稚園における子どもたちの庭」の幼稚園で園庭の一角に、子どもたちの菜園を設ける場合の一般的な注意といった叙述とは異なり、非常に具体的な助言が引用されている。

「秋になってほとんどの花が枯れてしまうと、子どもたちは翌年に備えて種の採取と収集をする。その後で花壇は鋤返されて翌年に備えて準備される。子どもたち総出で花壇の植物はしっかり根に近いところを持って根から抜かれて、花壇の隅に用意された堆肥の山の中に投げ込まれ、肥料にされる。落ち葉や雑草も乾燥させられてこの中には、・・・」⁵

といったふうに詳細なフレーベルの助言が紹介されている。これは、フレーベルの女性の弟子であったマーレンホルツ＝ビューローが、聞き書きしたフレーベルの「園芸教育学」(Garten-Pädagogik)の一端⁵だとして引用されているものであるが、こういう資料がもっと他にもあるのなら、ひょっとしたらフレーベルの園庭と子どもたちのための菜園は、彼の幼稚園教育学の中でもっと異なった様相を見せているのではないかと考えた

わけである。

また合わせて、今日の日本においては、子ども・子育て新システムでさまざまな議論と試行錯誤が進んでおり、幼保一体化の傾向に進みつつある。その中で、昨今、様々な形態、業態の保育所、幼稚園が混在している。その中で、子育て支援の一環として駅前保育所、或いは高層住宅に新規参入した幼稚園など、庭のない保育所・幼稚園が少なくないという現状がある。フレーベルが自然から学ぶことを説いていることから離れている状況といえよう。

そこで、筆者（藤井）は、2012年3月、8月の2回フレーベルの地を訪ね、子どもたちのための庭について調査研究をした。さらに、このあと日本においては、明治時代に初めて幼稚園として、創立された現お茶の水女子大学附属幼稚園、大阪市立愛珠幼稚園、並びに西脇市立西脇幼稚園の現在の庭を調査し、子どもたちのための庭の意義について検討して行きたいと考えている。

今回は、フレーベル提唱の幼稚園の名称の中の「園庭」と、実際の幼稚園の園庭との関連について考察してみたいと考えた。また、フレーベル博物館ロックシュタイン館長にインタビューをし、資料を基にフレーベルが子どもたちのために考えた庭について明らかにしたい。

フレーベル博物館に、日本から持参した造園計画案について、子どもたちのための庭をなぜ考え、どこにどのように計画をしていたのか、などの質問を試みた。さらに、新たな資料の発掘を試み、フレーベルの造園計画案が今の幼児教育に引き継がれている幼稚園の庭の意義について明らかにしたいと考える。

2. AWO フレーベルハウス幼稚園を訪問

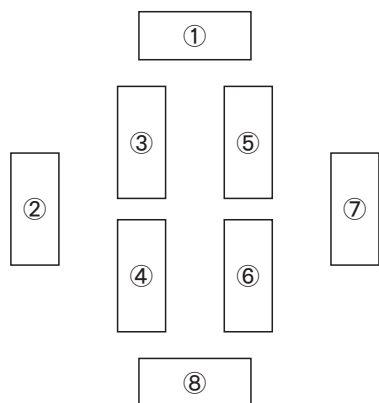
(1) AWO フレーベルハウス幼稚園における庭

バート・ブランケンブルクでフレーベルの名前を冠して運営されているフレーベル幼稚園を訪問した。正式名称は、Der AWO-Kindergarten “Fröbelhaus” Bad Blankenburg で、AWO「フレーベルハウス」バート・ブランケンブルク幼稚園ということになる。AWOは、Die

Arbeiterwohlfahrt（勤労者福祉組合）の略称で、日本で言うと、「生活協同組合」にあたるもので、幼稚園、学童クラブ、障害児施設、高齢者のデイケア、老人ホームなどまで生涯発達の全年齢段階を通してその教育、福祉サービスを網羅している。幼稚園は、ザールフェルト＝ルーデルシュタットの各地域に限らずネットされ、それぞれがAWO幼稚園として、その設置地区の地名の他に愛称を持っていて、このフレーベル精神を引き継いでいることを特徴とする幼稚園は、「フレーベルハウス」という。他の近在の施設は、「カラフルなお家」、「小人の国」、「お日様王国」、「雀の巣」、「お花畑」といった愛称をつけている。

フレーベルハウス幼稚園のベルグマン園長（2012年現在）に、園庭の花壇についてお話を伺ってみた。フレーベルハウス幼稚園の広大な庭の一角にフレーベルの造園計画の一部が子どもたちの花壇として設けられている。花壇の配置は、第4恩物の8つの積木を模して作られている。畳一枚ほどの花壇が8つあった。なぜ、この大きさなのか、と質問すると、「もっと大きくすると子どもたち同士のやりとりができない。また、ガイドラインがあってこの大きさではない。フレーベルは一人一花壇であり、どれだけきちんと育てるか、結果として明らかになる。しかし、この園では8つのグループで栽培活動をしているため、全員が取り組んでいるのではなく、残念ながら数人が主として活動しているとのことであった。

花壇の意義について、一つは、種をまき、芽が出て、花壇に植え、大きくなって実がなる。そのプロセスを大切に。球根より種であることが重要であると強調した。なぜなら、種からより大きなものが育ってくるからである。また、二つめとして、世話をしたり、水をやったりして植物を育てることである。つまり、水やりや雑草取りなど、それらを体験させることに意義がある。フレーベルが主張しているように、現在のフレーベル幼稚園においても、世話をしないで枯れてしまっても、先生方はフォローをしないとのことであった。世話をしないで枯れてしまった、ということ子ども自身が自ら体験し、次への教訓としてつなげ



- 1 くま組（4歳児） 収穫済み ツッカーエルプセ他
- 2 てんとう虫組（4歳児） ツッカーエルプセ他
- 3 ねずみ組（2歳児） カボチャ・ヒマワリ（大小）
- 4 ちょうちょ組（4歳児） キュウリ・パセリ・ヒマワリ
ダリア
- 5 はりねずみ組（2～3歳児） マリーゴールド他
- 6 はち組（5歳児） ツッカーエルプセ他
- 7 あひる組（3歳児） ツッカーエルプセ・ニンジン
- 8 ひつじ組（1～2歳） ハーブ（2・3種類）

図1 クラスの花壇

ることを大切にしている。さらに、植物の再生については、カボチャの栽培の例をあげ、カボチャの種から実がなり、収穫したカボチャを切ると種が再び出てくる。その種をまく。これらの循環から生命を尊重することを学ぶ。つまり命の循環である。のみならず、育たなくなることも体験する。

ベルグマン園長は、これからもフレーベルの理念に基づいて、ただし、（権威主義に依拠しているのではなく）今日の生活事情に即して、フレーベルの理念を大切に教育をしていきたいと結んだ。

(2) 幼稚園フレーベルハウスの庭

再度、8月にフレーベルハウス幼稚園を訪問した際には、3月に何もなかった花壇（図1）に花や野菜が植えられていた。また、すでに収穫をしておえた花壇もあった。3月に先生方が花壇について話し合いをし、4月に子どもたちと何を植えるか一緒に考えるのである。10月には霜がおりるため、最初の霜がおりるまでに収穫をする。そして、ガーデニングの季節は終わるのである。花壇は元通りにして、自然のままにしておいて、次のクラスが使うのである。ドイツのチューリンゲン州は、日本のように四季折々に栽培活動をする事ができない。なぜなら、山間部の寒冷地で10月には霜がおり、それ以降は雪が降り積もり栽培活動は休止せざるを得ないからである。

花壇は「子どものための花壇」であるため、全



写真1 フレーベルハウス幼稚園の園庭

ては教師と子どもで栽培し、保護者はあまり関与しない。ただ、早春の3月から4月に庭仕事の始まりの日が決まっている。その時は、保護者にきてもらい、いろいろ手伝ってもらうが、その日1日のみである。収穫した後、保護者を招いてサラダやカボチャやニンジンスープにして子どもと一緒に食べたり、ジャムなどに加工し、それを保護者に売り、子どもたちのためのものを購入したりしているとのことであった。

「庭」は子どもたちの自由な空間である。意義としては、フレーベルが「ブランケンブルクの小さな子どもたちのための庭<練習場>」に掲げられている内容である。身体を動かしたり走り回ったりして遊ぶ庭であること、自分たちで世話をするための、子ども達の庭であること、真心事（ま

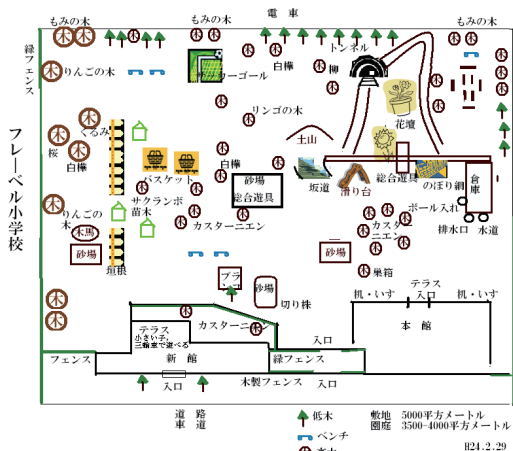


図2 フレーベルハウス幼稚園の園庭
(兵庫大学経済情報学部 高野敦子先生作)

まごと) や暮らしの中で遊ぶための場であること、親や幼稚園の協力者が訪ねてきたときの場である。フレーベルハウス幼稚園の庭(写真1)には、子どもたちが座るベンチやかくれる場や冬にはソリ滑りができる自然な築山等がある。

フレーベルの思想は今に引き継がれている。しかし、今日の環境や社会の変化により、フレーベルの考えた造園計画案が時代とともに変化してきていることは否めない。しかし、大局として庭の見取り図(図2)の中に秘められたブランケンブルクの子どもたちが大人達に守られ、栽培活動(自然)を通して学んでいるその大きな意義が今日に継承されている。

以上述べたように、フレーベルハウス幼稚園の教師が庭の意義を理解し、幼稚園生活の全ての中でフレーベルの理念を子どもたちに日々、保育を通して伝えているのである。

3. フレーベル博物館における新資料の発掘

(1) フレーベルの造園計画

フレーベル博物館に、ハンス・ヨアムヒ・ムッターの『フレーベルとモンテッソーリ』の中で、マーレンホルツ・ビューロー夫人の『フレーベル教育学の理論的・実践の手引書』から引用を示して、原史料について教を請うたところ、ロック

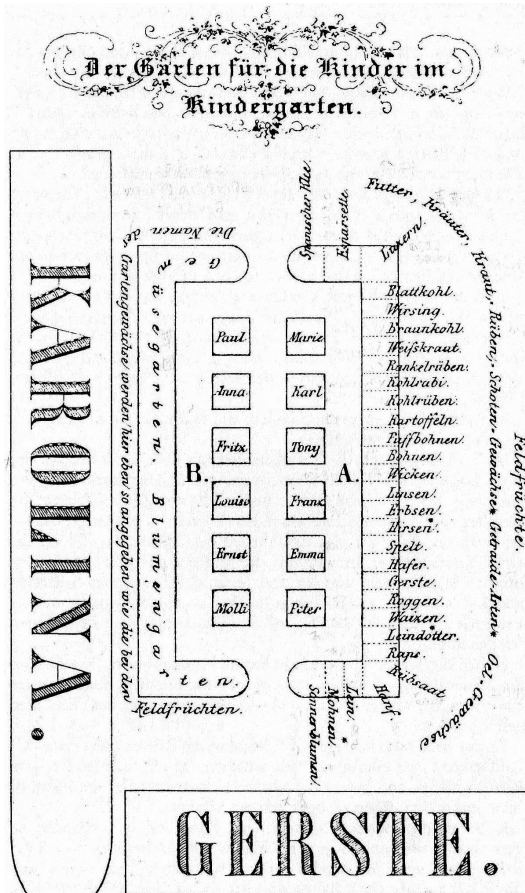


図3 Plan I
フレーベル全集第4巻より

シュタイン館長は、1850年4月15日の「人間形成のすべての支援者のための合同冊子」第15号に掲載された原本を提示してくれた。

その中に今まで日本訳の『フレーベル全集』第4巻にも紹介されていなかった資料を発掘した。それは、もう一つの造園計画であった。計画案にはI(図3)とII(図4)があることがわかった。持参したものがPlan Iで、発掘した資料: Plan II(図4)には幼稚園の裏手の高台の細長い土地の全体が描かれ、左に生活遊戯やおままごと等の遊びのスペース、その右手に運動場が配置され、その中央部にIの造園計画案が、より鮮明に描かれている。



写真2 子どもたちのための庭の模型図

幼稚園の建物と運動場、園庭、花

ロックシュタイン館長による解説である。Plan IIには、子どもたちが一つの花壇を持っている。取り囲んで大きな花壇があるのは大人達のものであり、お母さんや教師の花壇である。その思想背景は、子どもたちは大人達が守る。つまり一つの哲学の基に作られているのである。外側の世界から共同体が一人一人を守るという哲学の基に作られているのである。キンダーガルテンを庭として捉えれば、子どもの中には全ての要素があって、それぞれがひとつの種のようなものである。それを育てるように、しかも植物を育てるときに守ったり、世話をしたり、という子どもたちの自己活動と合わせて、象徴的な意味合いも含めて庭をフレーベルは造ったのである。

自然の中に生きていく、我々の自然に対して責任もある。自然は、だからといって秩序だったものではない。栽培活動を行っている子どもたちは、その時、その場で全てを理解するとは限らない。その後、いつか、いつか（強調して）子どもたちは思い当たることがある。そのために子どもたちのための庭を造っているのである。現代の問題とも絡むのである。

キンダーガルテンという表現は、いい言葉である。子どもたちの中には、あらゆる可能性が潜在的に秘められている。それを庭師が庭を育てるように庭の植物を栽培するように開花させていく。

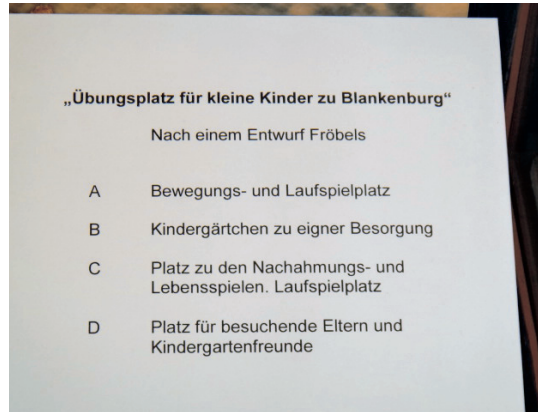


写真3 模型図の説明

フレーベル博物館展示

そういう思いがキンダーガルテンである。庭の植物を子どもたちが自分自身で世話をする。そのことに意味があるのである。たっぷり水をやったり、少なく水をやったりする。そうすると、それにちゃんと答えが返ってくる。それを子どもたちは理解するのである。

花壇に一人一人名札を立てている。例えば、カリちゃんが世話をしなかったら植物は駄目になる。だからといって、教師がそこに一緒に水をやるわけではない。教師は横で見ている。「あー駄目だった。」パウロ君はちゃんと世話をして育てることができた。教師は彼を褒めてやるのである。

名札の幅は4 cm半、厚みは6 mmと決まっているが、長さは好きにしてよいのである。名札は書くより、恩物である一つの教具（棒状のもの）を折ったり、長さを変えたりして子どもが自分で作ることに意味がある。

周囲の大人達が、子どもたちの可能性や天分そして才能を育ててやると開花するのである。つまり、自然とのふれあいの中で開花させるのである。子どもたちが自然に自らかかわって何かをする。それによって子どもたちは育つのである。庭師が来て植物を育てるのでなく、子どもが自分で育てることに意味があるのである、とこのような説明を頂いた。

(2) 菜園の計画の検討

まず Plan I であるが、こちらは、邦訳『フレーベル全集』第4巻に掲載されているものである⁶⁾。

中央に島状に子どもたちの花壇が配置されている。それぞれに名前が付されて、Paul、Anna、Fritz、Loise、Ernst、Molli、Marie、Karl、Tony、Franz、Emma、Peter の12名の名がある。苗字はない。

大きく表記されている“KAROLINA.”(カロリーナ)、“GERSTE.”(大麦)は、子どもの花壇、野菜畑に立てる名前の標識のサンプルで、庭の配置計画とは別のもの。

左側に菜園、花壇とあり、ここには個々の草花、植物の具体的な名前はなく、右の側に29品種の野菜、草花が挙げられている。畑作物で、飼料、菜葉、アブラナ科、マメ科、穀類、油をとる植物という見出しがある。29品種の野菜、草花のうち野菜、穀類が圧倒的に多く、草花ではひまわりが入っているだけ。上の方から順番に便宜的に番号を振って、それぞれの植物を確認した。しかし、19世紀後半の呼称で、日本で言うと幕末から明治にかけての園芸作物が今日の何に当たるかを確認するようなもので、はっきりとは確定できないものも少

なくない。

またこの造園計画は、館長の説明によると実現しなかったものである。Plan I が、1850年の発表であれば、亡くなる2年前で、彼自身が手がけて実現にこぎつけるまでの時間的余裕がなかったのかということ、そうではない。その後も今日に至るまで、この計画は実現できていないというか、実は実現不可能だったのだという。フレーベルが、豆類が好きで、かなりいろいろな豆が挙げられているが、寒冷地のためその一部がこの地では根付かなかったとのこと、ひまわりも油を採取するのに適した品種は育たなかったとのことで、計画通りの品種で菜園は作れなかったというわけである。Plan II の方では、スイスの山岳地など特有の花や植物もリストされていて、これが高緯度の山間部の寒冷地の園庭であることが、改めて確認させられる。

さて、今回、ロックシュタイン館長から示されたもう一つの造園計画が、Plan II である。これは菜園だけでなく、幼稚園の園舎以外の全空間を網羅している。国内では、まだフレーベル研究の中で一般に紹介されたことのないもので、既出の荘司泰弘の幼稚園の園庭に関する論文の中にも出

「表1」 Plan I 菜園の植物名

- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| 1. Spanischer Klee — 文字通りだと、スペインクローバー。一節には、トルコクローバーのこととも、Eparsette (むらさきうまごやし) のことともいう。 | 14. Bohnen — 大豆。 |
| 2. ■Eparsette — イガマメ。Plan II では、Eparset の表記。 | 15. ■Wicken — カラスノエンドウ。 |
| 3. ■Luxern — むらさきうまごやし。 | 16. ■Linsen — レンズ豆。 |
| 4. Blattekohl — 葉キャベツ | 17. ■Erbsen — えんどう豆。 |
| 5. ■Wirsing — ちりめんキャベツ | 18. ■Hirsen — キビ。 |
| 6. Braunkohl — 赤キャベツ | 19. ■Spelt — スペルト麦。Plan II では、Dinkel として登場。 |
| 7. Weißkraut — 白キャベツ | 20. ■Hafer — カラス麦。 |
| 8. Rankelraben — 甜菜 (てんさい) | 21. ■Gerste — 大麦。 |
| 9. ■Kohlrabi — カブキャベツ | 22. ■Roggen — ライ麦。 |
| 10. ■Kohlruben — かぶら葉ボタン | 23. ■Waizen — 小麦。 |
| 11. ■Kartoffeln — ジャガイモ。Plan II では Erdbirne、Erdäpfel として表記。いずれかがジャガイモではない可能性あり。 | 24. Leindotter — アマナズル。 |
| 12. Puffbohnen — Saubohnen、Schweinbohnen、Dicke Bohnen、 | 25. Raps — 菜の花。 |
| 13. Viehbohnen、Ackerbohnenとも表記し、そらまめのこと。 | 26. Bühsaat — 菜種。 |
| | 27. ■Hanf — 麻 |
| | 28. ■Lein — 亜麻。Plan II では、Flachs として登場。 |
| | 29. ■Mohnen — 芥子。 |
| | 30. ■○Sonnenblumen — ひまわり。 |

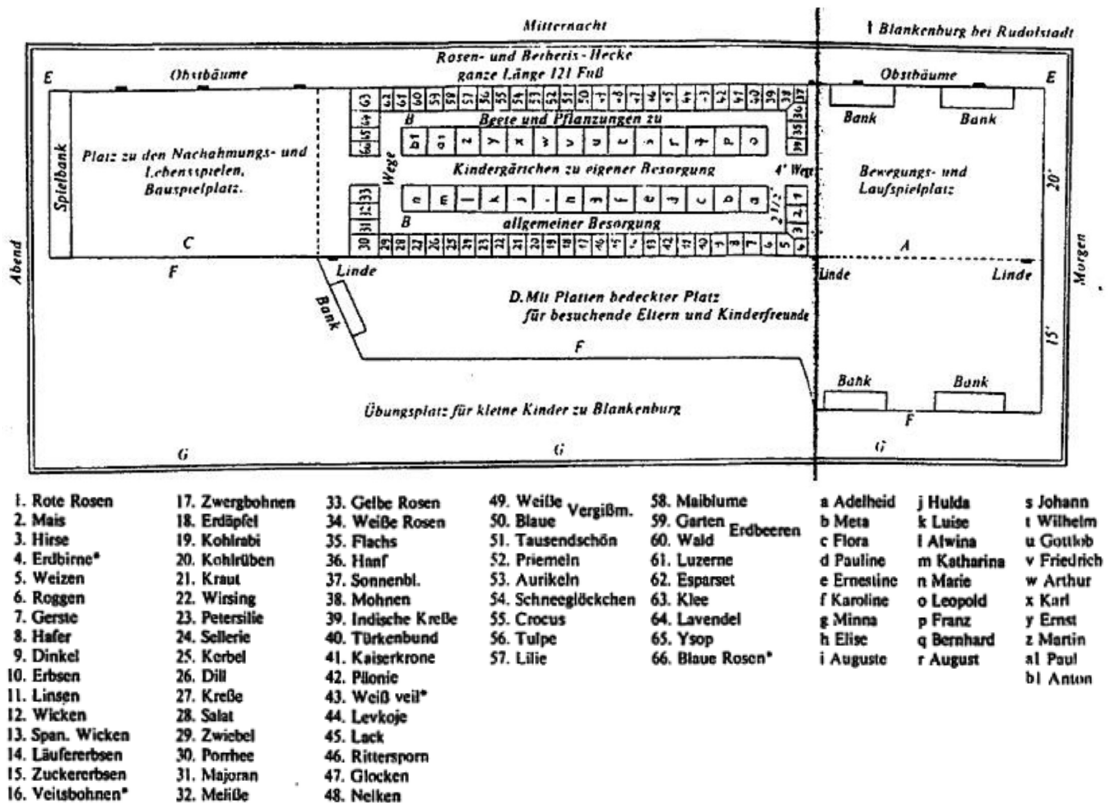


図4 Plan II

ベアテ・ハーン著 “Der Kindergarten ein Garten der Kindern.” より

てこないものである。

これはベルリン遺稿の中にあったもので、ベアテ・ハーンが自著 “Der Kindergarten ein Garten der Kindern.” (1936) の中で紹介しているもので、タイトルとして「ブランケンブルクの幼児たちの活動場所の配置のための基とするための一時的に書き留めたスケッチ」という記載がある。Plan I をもとに更に詳細に検討を加えたものと考えられる。

では、庭の園芸作物一覧（園芸作物66品目、他に子ども用の花壇スペース28人分が花壇の中央部に島のよう配置されている。）花壇の島（B）の左手（C）は模倣遊びと生活遊びや建築遊びのための場所、右手（A）は運動や駆けっこのための場所。いずれも北側には果樹が植えられている。花壇の島の下方は、見学の親御さんや子ども好き

な人たちのための板張りになった部分で、ベンチがある。遊び場との間には、菩提樹が配されている。中央の花壇の長さは、121歩とあり、北側にはバラとメギ（目木）の生垣がある。メギは、産地や丘陵地になどに生える落葉の低木で、秋の終わりになると実が赤くなる。枝や葉の付け根に鋭い棘があり、「ヒトサワレズ」、「コトリトマラズ」、「ヘビノボラス」などの別名がある。これは侵入者防止の有刺鉄線代わりのものであろう。

更に設計図全体の外側に、右端に Morgen（午前）、中央上部に Mitternacht（真夜中）、左側に Abend（午後）の文字が書き込まれている。Plan I よりも、様々な意味合いでより精緻に描かれている。一日の様々な時間というつもりであれば、Mittag（真昼）がない。真昼を書き込もうとすると、それは下の枠線の G の位置辺りにな

り、時計回りに一日の時間が円を描くように配列される。ただし、真昼はこの園庭の中にはない。書き足すとしたら幼稚園の園舎があるあたりになる。昼間、幼稚園の中で過ごす時間は、真昼の時間になるわけである。左右が午前午後、中央が真夜中という意味かと思われる。おそらくドイツロマン主義の画家たち、カスパー・ダヴィット・フリードリヒやフィリップ・オットー・ルンゲたちが好んでテーマとして取り上げた、一日の4つの時間や人生の四季といったモチーフ^{7, 8}を、子どもたちが幼稚園の中で過ごす時間を、一日の中の4つの時間として重ね合わせるのではないかと思われる。なお、メギの生垣に隔てられたその先は、山になっており、その大きな自然を「真夜中」と考えることが出来ないかという提案も頂いたが、生垣がメギということもあり、子どもたちがそこから頻繁に出入りするということは、フレーベルの念頭になかったのではないかというこ

「表2」 Plan II 菜園の植物名

- Rote Rose - 赤いバラ。一般には、赤いバラは愛の象徴。テオドール・シュトルムに「赤いバラ」(Roten Rosen)という詩がある。ロマン主義の「青い花」と対置されて、血、炎、燃えるような情熱の象徴。33、34、66に「黄色い」バラ、「白いバラ」、「青い」バラがある。66. Blaue Rosen は、矢車草かもしれない。「黄色い」バラ、「白いバラ」が、額面通りバラなのかどうかは不明。
- Mais - トウモロコシ。イネ科の一年草で、背丈は2〜3mにも及ぶ。4月に蒔いて8月に収穫。
- Hirse - 「キビ」のこととも言われるが、広く小規模に栽培されている11〜12種類の穀類の総称、雑穀。アワ、キビ、ヒエ、ハトムギ、オーツ麦など。生物学的な名称ではなく、農学的な名称。
- Erdbirne - 「地面の中の梨」ということで、ジャガイモの別称。(原注: マメ科の植物もしくは菊芋の可能性もある。)
- Weizen - 小麦
- Roggen - ライ麦
- Gerste - 大麦
- Hafer - カラスムギ
- Dinkel - スペルト麦。スペルト麦なら、Spelz、もしくはSpeltと現在は表記。日常的には、Schwabenkornという言い方もされる。
- Erbsen - エンドウ
- Linsen - レンズ豆
- Wicken - カラスノエンドウ
- Span.Wicken - そらまめ
- Läufererbsen - えんどう豆の一種の古名。現在のどれに当たるのか不明。
- Zuckererbsen - 英語でSugar Pea、さやえんどう。茹でると甘みを増すことからの呼称。
- Veitsbohnen (原注: 一般的なGartenbohneのこと。) - いんげん豆。Grüne Bohnenのこととしてネット上では料理のレシピなどが紹介されている。
- Zwergbohnen - Krupbohnenともいい、ドワーフ豆の意。日本では、つるなしインゲン(てなしインゲン)。
- Erdäpfel - ジャガイモ、Kartoffelのこと。4. Erdbirneと別物かどうかは不明。
- Kohlrabi - カブキャベツ
- Kohlrüben - かぶら葉ボタン
- Kraut - ハーブ、野菜のこと。もしくは、南ドイツではGemüsekohlrabi、ハナカンランのこと。
- Wirsing - ちりめんキャベツ
- Petersilie - パセリ。
- Sellerie - セロリ。
- Kerbel - セリ科ジャク属の植物。ノハラジャク、チャービル(Chervil)など。
- Dill - イノンド、セリ科の一年草。英名は、ディル。種子や葉が香辛料、生薬として用いられる。カレーやピクルスにも使われる。日本でも、最近ハーブ関連書籍では、ディルと表記されている。
- Kresse - オランダカラシ属のクレソン(Gartenkresse)。クレスとも呼ぶ。

とで、今回はその解釈は取らないこととした。

Plan II 菜園の植物名「表2」草花や園芸作物についての通しナンバーは、フレーベル博物館の資料にあるものをそのまま転記させてもらっている。

子どもたちの名前は、a Adelheid、b Meta、c Flora、d Pauline、e Ernestine、f Karoline、g Minna、h Elise、I Auguste、j Hulda、k Luise、l Alwina、m Katharina、n Marie、o Leopold、p Franz、q Bernhard、r August、s Johann、t Wilhelm、u Gottlob、v Friedlich、w Arthur、x Karl、y Ernst、z Martin、al Paul、bl Anton。Plan I の中の子どもの名と重複する名前が6名含まれている。ファーストネームのみなので同一人物との保証はないが、2つの計画は近い時期のものではないかと推測される。

28. Salat - サラダに使用する低カロリーのサラダ菜、キャベツ、レタスその他の総称。
29. Zwiebel - 玉ねぎ。
30. Porree - 現在の表記は、Porree で、ポレ、和名はポロ葱。
31. Majoran - シソ科の多年草。マジョラム。ハーブとして香辛料や精油など用途に用いられる。オレガノと同属。
32. Meliße - レモンバーム。
33. ○Gelbe Rosen - 黄色いバラ。
34. ○Weiße Rosen - 白バラ。この2つの色指定されたバラは、花言葉以上に意味不明。
35. ■Flachs - Leinと同じ。亜麻。
36. ■Hanf - 麻。
37. ○Sonnenbl. - ひまわり (Sonnenblumen)
38. ■Mohnen - 芥子。
39. ○Indische Kresse - Kapzinerkresse (文字通りでは、カプチン派修道士の草)ともいう。のうぜんはれん、金蓮花。花や若葉はサラダに入れて食用にされる。クレソンを思わせる辛味がある。熟す前の種を塩漬けにしてケッパーの代わりに使うこともある。
40. ○Türkenbund - トルコキャップユリ (Lilium Martagon)。
41. ○Kaiserkrone - オウカンソウ。インペリアルクラウン (ヨウラクユリ)。
42. ○Päonie - Paeonia、これは古代ギリシアの医の神Paeonに由来する名で、中国原産の牡丹。
43. ○Weiße veil (原注: Weißveilchen - 白スマイル、おそらくは Märzenbecher - 黄色の水仙に似た植物でアマリス科の花のことではなからうか)
44. ○Levkoje - アラセイトウ。アブラナ科の属の一つ。
45. Lack - 漆。
46. ○Rittersporn - 飛燕草 (ひえんそう)。
47. ○Glocken - Glocken Blume のことなら、つりがね草。
48. ○Nelken - なでしこ。
49. ○Weiß Vergißm - Vergißmeinnicht のこと。忘れな草。春の花。淡青が本来の色で、園芸種には白、薄ピンク色のものもある。
50. Blaue - これだけでは、「青い」の意。ノヴァーリスの「青い花」、美術史の「青騎士」など連想されるものは多数。ロマン主義の象徴的な色。花の名前として特定は困難。
51. ○Tausendschön - ひなぎく。
52. ○Priemeln - サクラソウ。
53. ○Aurikeln - プリムラ・アウリクラ、白い粉に覆われた葉に、明るい黄色の花をつける。ヨーロッパの山岳部に分布。オーリキュラの原種のひとつ。
54. ○Schneeglöcken - スノードロップ、マツユキソウ。
55. ○Crocus - クロッカス。
56. ○Tulipe - チューリップ。
57. ○Lillie - ユリ。
58. ○Maiblume - Löwenzahne、Butterblume、Kettenblume、Pferdeblume ともいい、タンポポのこと。
59. Garten Erdbeeren - いちご
60. ○Wald - Wald Gebstern のことなら、ユリ科の Gagea fistulosa ガゲア・フィストロサ。和名キバナノアマナ。ヨーロッパの山間部に植生。黄色の星のように花卉の開いたユリの一種。
61. ○■Luzerne - ムラサキウマゴヤシ、アルファルファ。
62. ■Esparsset - イガマメ。
63. Klee - クローバー、シロツメグサ。
64. ○Lavendel - ラベンダー。
65. Ysop - 地中海の東から中央アジアの地域に植生する半樹木。ヒソップ。高さは60cmくらい、夏の間先端に小さな青い花が咲く。10-12の種があるが、最も知られたものがヤナギハッカ。
66. ○Blaue Rosen (原注: Kornblume か、Ackerwitwenblume かもしれない。) - Kornblume なら、ヤゲルマソウ。Ackerwitwenblume は、学名 Knautia arvensis、マツムシソウ科のヨーロッパ原産の花。秋に咲く花、寒さには強いが、暑さに弱い。野草として分布。

凡例

- Plan I と Plan II の両方に出てくるもの。20品種。ただし、Plan II にジャガイモと見られる品種が2つでてくるので、Plan II には21品種になる。
- 観賞用の草花には野菜、穀類と区別するために○を付した。

フレーベル自身の見解は、既に触れた「幼稚園における子どもたちの庭」(“die Gärten der Kinder im Kindergarten”) にあり、その出典は、Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Nr.15. Montag, den 15. April. p.1-5. 1850になる。

4. おわりに

芸術史家のハンス・ゼードルマイヤーに19~20世紀の造形芸術の中で、自律性、純粋性を追求するあまり、その中の象徴性、価値の表象が失われ、人間像が混乱し、カオスの中に投げ込まれていくかのように推移していくさまを造形芸術史として

叙述した『中心の喪失 危機に立つ近代芸術』(Verlust der Mitte. Die bildende Kunst des 19. und 20. Jahrhunderts als Symptom und Symbol der Zeit) という有名な著作があるが、フレーベルの幼稚園においては、ある意味、園庭こそがその中心の一つだったのではないかと思える。

園庭は、まさに子どもたちの自己活動の作業場であり、また生活遊びや運動あそびの場とも隣接している。自然の草花や動物たちとも触れ合え、ここには大人たちの権威もその主張を強くせず、教室の縛りからも開放される。運動場ではない、「母の歌と愛撫の歌」の「花かご」の絵にあるような園庭が、その意味を取り戻すなら幼稚園は今あるものとはまた違った意味を見出すかもしれない。

脚注

- 1 何気ない表現ではあるが、フレーベルはなぜ「花園」という表現にこれほどまでの愛着を感じたのか。自伝から教育論的著作を含めて、教育思想の歴史の中で自らの著作の中に彼ほど花や植物、樹木の名前を登場させた人物はいない。今回、フレーベルの生誕の地オーベルヴァイスバッハを中心とするチューリンゲン地方が、ハーブなどから抽出した塗油薬 (Ölitat、ガマの油のようなもの) の一大生産地だったことが分かった。近年は、メディカルハーブオイルという呼び方もされる。薬を入れるガラスの瓶の生産もこの地に根付いた産業だったとのこと。知識と技術はフランシスコ会の修道士により伝えられたという。彼らは、日本の富山の薬売りのように、背中に背負ってここからヨーロッパ中に売り歩いてきたとのこと。Buckelapotheker というのが、こうした旅の薬売りの呼び名であった。フレーベルの家は、牧師でそのような事業には関与していなかったが、幼少期の思い出の中に既に花や花壇、庭が出てくる。「この建物は他の建物や壁や生垣の有刺鉄線にびっしりかこまれ、さらに通り抜けを厳禁されていた中庭や、草や野菜の植わった庭にかこまれていまし
- た。」(フレーベル全集 第1巻、p.63)、他にハシバミの花の思い出など。彼が花や草花が癒しや慰めとなるという場合、こうした背景も考慮する必要があるはずである。
- 2 荘司雅子：「解説」『フレーベル全集』第4巻 玉川大学出版部 1981年 p.805-806
- 3 荘司泰弘「フレーベルの恩物研究(第18報) 一園庭について一」研究論叢. 芸術・体育・教育・心理51(3), p.228 2001年
- 4 荘司泰弘：前出 p.227-229
- 5 Marenholz=Bülow, B von; Theoretisches und praktisches Handbuch der Fröbelschen Erziehungslehre, 2 Teile, Kassel 1886
- 6 前出 p.551